



# イノシシと黄 金の木

---

---

夢野あんず

---

ずいぶんと山奥にイノシシの夫婦と三頭の赤ちゃんイノシシが暮らしていました。

今年は、天候が悪かったせいで、食べ物が少なく、みんなお腹をすかせていました。

そして、母イノシシは、とうとう乳が出なくなり弱って死んでしまいました。

「お腹がすいたよ～。おか～さ～ん。」

子ども達は、ついに泣き出しました。

「早く食べ物を見つけてこなければ・・・」

父イノシシは、そうつぶやきながら、食べ物を探しに出かけました。

けれど、行けども行けども食べ物は見つかりません。

「今日も何もなしなあ。」

と、父イノシシが、あきらめて帰りかけたその時です。

目の前に、その実を一つ食べればたちまちお腹が満腹になると言われている幻の黄金の木が、三つの大きな実をつけて立っていました。父イノシシは喜びました。

「よかった。子ども達に持って帰ってやろう。」

と、急いで実を採ろうとしたそのときです。

「イノシシさん、どうかこの実をまだ採らないでください。今はまだ渋いです。完熟になると甘くておいしくなります。それまで待ってやってください。お願いします。」

突然の木の言葉に父イノシシは驚きましたが、

「待てん、みんな食べ物を待っているのだ。」

と、荒い鼻息で怒鳴りました。それでも木はさらに続けました。

「我々の木はこの実が完熟になって初めて種も育ち子孫を増やすことが出来るのです。そうすれば、来年もまたどこかで実をつけることが出来るでしょう。」

さすがの父イノシシもそれを聞くと少しだけ待ってやろうと思い、

「では、いつ完熟になるんだ。」

木はあわてて答えます。

「あと十日。」

「うそじゃないだろうな。毎日来てみるぞ。だましたら木ごと引っこ抜くからな！」

ひづめで、地面を蹴りながら、父イノシシは言うど、他の食べ物を探しにその場を去りました。その日もろくな食べ物も見つからず、小さな虫を見つけて子ども達に持って帰りました。

次の日、また父イノシシは、昨日見つけた黄金の木の所へやってきました。

「やい、もう完熟になったか？」

「いいえ、あと9日。」

また、父イノシシは、小さな虫を見つけて子ども達に持って帰りました。

父イノシシは、毎日黄金の木の所に行っては、熟れ具合を確かめていました。

5日目を迎える頃、日照りはいっそうひどくなっていました。いつものように黄金の木の所へ行った父イノシシは、木の様子がおかしいことに気づきました。

「やい、実は大丈夫か？なんだか元気がないようだが」

「すみません。完熟になるよう頑張っていたのですが、もうだめかもしれません。せっかく今まで待ってもらっていたのに。。。どうか、私が枯れる前に、この実を食べてください。」

「お前の種は、もう育ったのか？」

父イノシシは、聞きました。

「もう無理です。どうせ枯れるのですから。」

木は、力なく答えました。

父イノシシは、ずっと待っていたので、完熟になるまで見届けたくくなりました。

「ちょっと待っている。」

そう言うところかへ行ってしまいました。

しばらくして父イノシシは、どこからか水を持って帰って来ました。

「さあ、これを飲め！」

そう言って、木の根元に水をかけてやりました。

「ああ、おいしい」

木は、涙を流しながら喜びました。

父イノシシは、次の日も、その次の日も、また次の日も水を運んできました。そしていよいよ完熟になる日が来ました。父イノシシがやってくると、木は、

「イノシシさん、今までありがとうございました。おかげで私は実を完熟に育てることが出来ました。これで子孫を残すことが出来ます。どうぞ、私の実を食べてください。」

父イノシシは、毎日えさを探しに歩いたり、遠くから水を運んで来たりで、もう体力が限界にきていました。

「では、この実はいただいて行くよ」

父イノシシは、急いで子ども達に実を届けると、

「これで、お前達は大丈夫だ。これからは自分達で食べ物を見つけるんだぞ」

と、言い残すと、黄金の木のところへ向かって歩き出しました。ようやくたどりつくと、

「ありがとう。これで私も子孫を残せるよ」

と、お礼を言うと、ついに力尽きてしまいました。父イノシシの上に覆いかぶさるように黄金の木も枯れてゆきました。

次の年、そこには、前よりりっぱな黄金の木が、たくさん実をつけて立っていました。

イノシシの子ども達も立派に成長し、その木の周りで家族と仲良く暮らしました。

おしまい

## イノシシと黄金の木

<http://p.booklog.jp/book/62876>

著者：夢野あんず

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akmeet/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62876>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62876>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ